

いもう 葦毛通信



ナガバノイシモチソウ

2025年12月8日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町三丁目1
TEL: 0532-56-6060

No. 178

1. 2025年ナガバノイシモチソウ経過報告—2(最終報告)

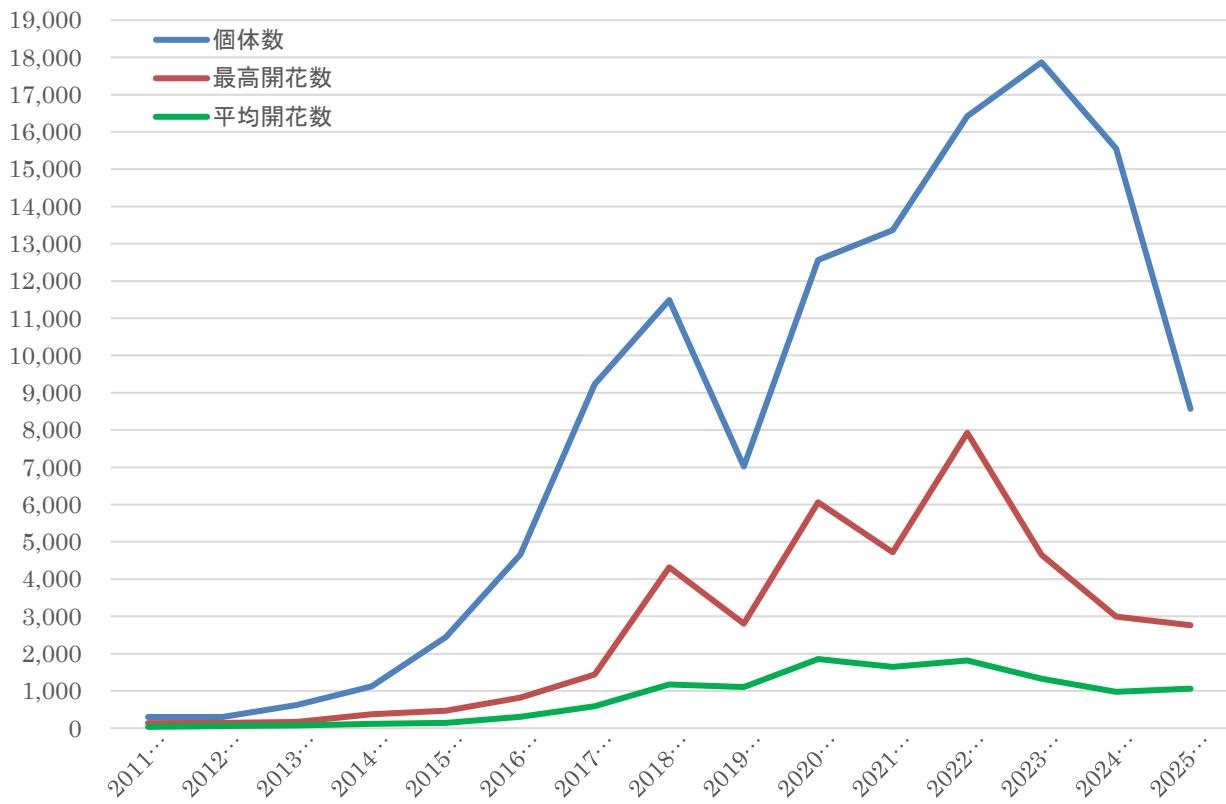
1) 自生個体数の変化

2025年のナガバノイシモチソウの自生個体数は、これまでで最大の減少率を記録しました。個体数は基準日の7月31日で**8,570個体**になり、昨年同時期の**15,550個体**の約**55%**に**著しく減少**しました。これまでの最高記録だった2023年の**17,869個体**と比較すると、2年で約**48%**に減少し、ほぼ半減しました(下図参照)。

なお、自生個体数は9月1日には**8,325個体**になり、7月末が個体数の最高記録でした。これまで個体数の計測は基本的に7~9月の月末に計測していました。最高個体数を記録したのは、個体数の計測を始めた2013年から2022年までの10年間はいずれも8月末か9月末でしたが、2023年から3年続けて7月末に最高個体数を記録しています。この最高個体数を記録する時期が早まったという変化が個体数の減少と関係する可能性がありますが、まだその原因は特定できていません。

豊橋のナガバノイシモチソウ自生地では、2014年8月から電池式タイマーを用いてスプリンクラーによる自動散水を行っています。水道栓は5か所あり各2基のスプリンクラーで計10基を設置しています。一度に散水すると水圧が下がって遠くに飛ばないため、順番に3回に分けて時間をずらして、4~10月は朝夕2回30分ずつ散水しています。

ナガバノ開花数・個体数変遷図



個体数の減少に関して、2024・25年に個体数が減少したのは、スプリンクラーで上から水をかけるのでナガバノイシモチソウの葉から出た粘液を洗い流してしまい、虫を捕まえることができず栄養分不足で種子ができなくなっているからだ、という意見があります。しかし、2014年にスプリンクラーで散水を始めてから一貫して同じ方法で散水を行っており、2023年までは2019年に散水量を半減させたときに個体数が減少した以外はすべて個体数が右肩上がりで増加しています。個体数は2012年の**300個体**から、2022年8月31日には最高記録の**19,662個体**にまで、**65倍以上**に増加しました。

2024・25年で個体数は極端に減少しましたが、散水方法はこれまでと同じ方法を継続しています。つまり、個体数減少の原因が散水方法ではないことは、これまでの記録から明らかだと思います。

現状で考えられる最も可能性が高い見解は、葦毛湿原のハルリンドウやミカワバイケイソウで見られたように植生回復作業を行ってから一定期間は右肩上がりで個体数や開花数が増加する**再生期**を経過しますが、これを過ぎると開花パターンが変化して増減を繰り返す**定期**に入るというもので、ナガバノイシモチソウも同様である可能性が高いと思われます。来年の個体数と開花数のパターンを確認しなければ断定はできませんが、来年は個体数と開花数が増加し、葦毛湿原と同様のパターンに入る可能性は十分に考えられます。

2) 開花数の変化

今年はナガバノイシモチソウの一日の最高開花数が**2,762輪**となり、2024年の**2,990輪**より約**8%減少**しました。平均開花数は**1,057輪**となり、2024年の**972輪**より**約9%増加**しました。延べ総開花数は**133,151輪**となり、2024年の**124,369輪**より**約7%増加**しました（前頁ナガバノ開花数・個体数変遷図参照）。

基準日の個体数はほぼ半減するほど大きく減りました。しかし、最高開花数は若干減少しましたが、平均開花数と総開花数は反対に若干ですが増加しています。全体としては個体数の増減と開花数の増減が連動せず、個体数が半減しても開花数は若干増加している状態です。これまで全体では規則正しく隔年で増減を繰り返していましたが、2024年からは異なったパターンに入ったと考えられます。

3) 開花のパターン

次頁の表はナガバノイシモチソウの一日ごとの開花数を示したグラフですが、開花数が増えた2018年から今年までの8年間はかなり似た開花パターンになっています。この8年間は雨が多く降って開花しない日以外はほぼ毎日開花数の調査を行い、毎年100回以上の計測を行ってきました。

これまでの開花パターンでは、7月下旬から8月にかけて、いずれも毎日多くの開花数を記録し安定して開花しています。8月下旬から10月にかけては一定量の花は咲きますが、短期間で増減を繰り返しているようで開花数は安定していません。つまり、開花期の前半と後半で開花パターンに明確な違いが見られることがわかっています。

2025年は7・8月にほとんど雨が降らず、10月初めまで高温が続き酷暑の夏でした。2024年は8月27日から9月1日までの6日間雨が続く長雨の影響で9月2日には開花数が7輪になり、その後、9・22・28・51・174輪と増えました。まるでリセットボタンが押されたように徐々に開花数が増えるという状態でした。この部分を除くと2024年と2025年の開花数の変化はかなり類似した状況です。

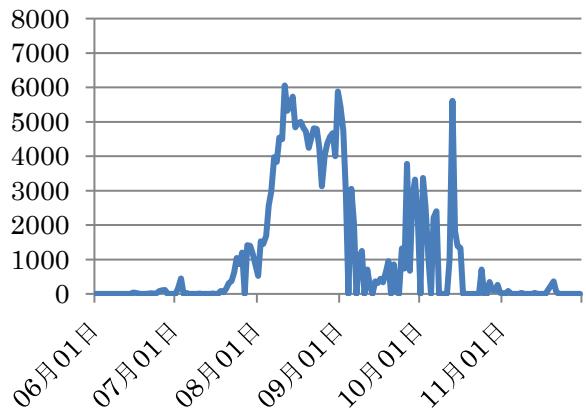
また、2020年10月13日は開花数が前後の日より一日だけ突然増えて5,610輪を記録しました。12日は1,005輪、14日は1,824輪で、13日の開花数が極端に増えているのがわかります。このように1日だけ開花数が爆発的に増える**特異日**が観察されました。この特

異日は2022年には、10月16日に7,926輪、15日（1,306輪）、17日（3,706輪）、2023年には10月12日に2,522輪、11日（368輪）、13日（135輪）と3回記録されています。しかし、2024・25年に特異日は確認できませんでした。

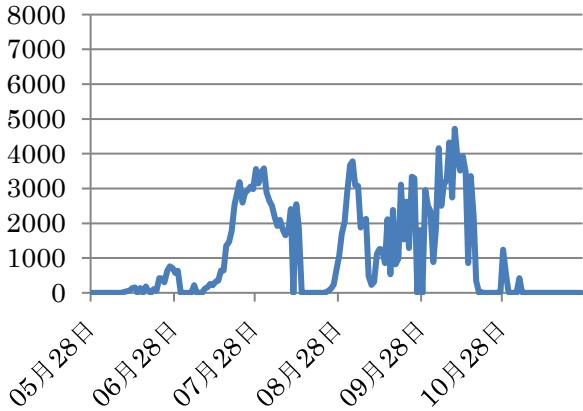
特異日が再生期特有の現象なのか、それとも偶発的に起きる現象なのかをはっきりさせるためには、もう少し継続的に観察しなければならないと思います。

ナガバノイシモチソウ日別開花数

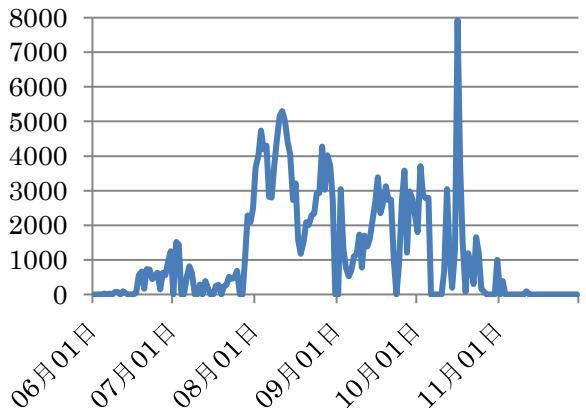
2020年（110回観測、平均1,854輪、最高6,057輪）



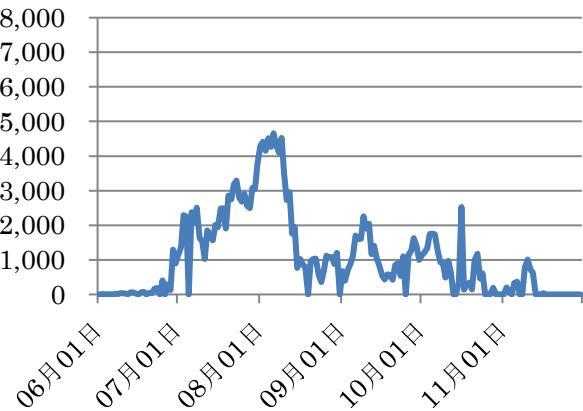
2021年（117回観測、平均1,649輪、最高4,717輪）



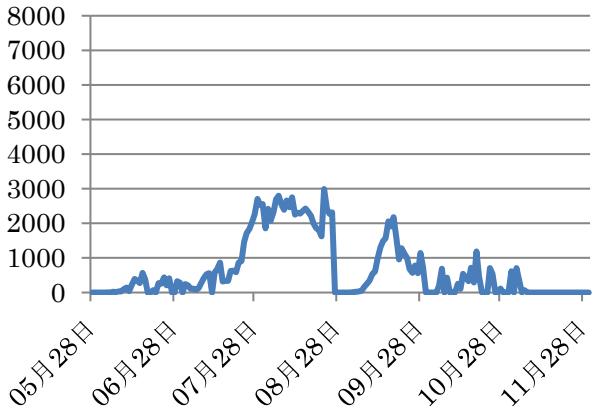
2022年（122回観測、平均1,818輪、最高7,926輪）



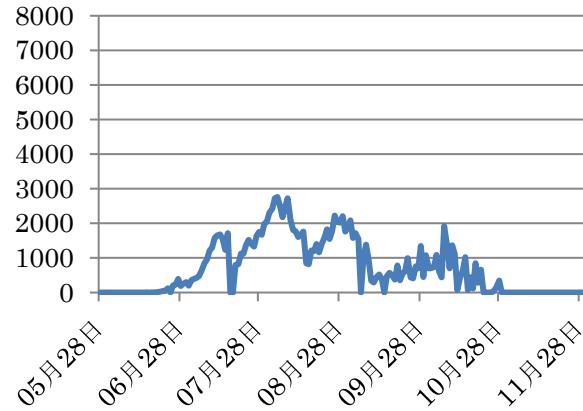
2023年（148回観測、平均1,327輪、最高4,656輪）



2024年（128回観測、平均972輪、最高2,990輪）



2025年（126回観測、平均1,057輪、最高2,762輪）



4) 各地点での状況

2025年も第1～7地点で白くなつて集中する群落が見られました。下左の写真は第1地点から見た自生地全体の写真で西から東を見たところです。中央左側に白くなつた群落が見えます。ヤマイが増えすぎたので、穂を刈り取る作業を行つてゐるところです。中段左の写真は水たまりを囲むようにナガバノイシモチソウが集中しているところです。2025年のナガバノイシモチソウの生育は順調に推移し、結実も順調に進んでいます。



第1地点（2025年8月26日）

第4地点（2025年9月3日）



第5地点（2025年8月26日）

第7地点（2025年8月26日）



開花状況（2025年9月3日）

結実状況（2025年9月25日）